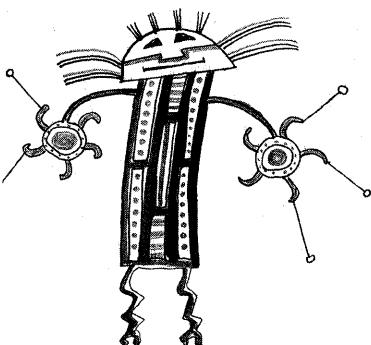


「産」という営みの共有

中華書局影印

△ある鮮明な記憶△

長時間トラックに揺られて三毛猫のオスが我が家にやってきた。当時猫の年は六、七歳、私が一〇歳位だったと思う。その猫、ミーは初めての土地が不安なのか到着した日から異常なまでに私にまわりつき、夜は私の布団に潜り込んできた。一週間後、私は夜中に目覚め、暗闇の中で戦慄した。左腕に感じた猫の毛の感触。加えて左足元にも猫の毛の感触があるのだ。白状すると咄嗟に「ミーをふんじやった。どうしよう、のびちゃったんだ」と思つた。慌てて電気を付けると、そこには最前の戦慄を越える光景が目に飛び込んできた。



オス猫のはずのミーが赤ちゃんを産んでいる。シーツは一面に濡れ、足元の毛の感触は、すでに産まれていた子猫のそれだった。ミーは目に涙を浮かべながら一番目の子猫

を、今まさに産まんとしており、しつばの付け根辺りから子猫の体半分が見えていた。猫も涙を浮かべること、赤ん坊がどこから生まれるのかということを、私はこの時初めて見知った。ネットの子猫が産まれ、やがてグニャグニヤの固まりが出てきた。ミーは自分のお尻をペロペロ舐めたかと思うと、その固まりを食べ始めた。それが何なのか当時の私は知るよしもない。ただ、ネット子猫の体の紐とつながっているその固まりを親猫が無心に食べ、紐の途中で食いちぎるさまを、まんじりともせず見ていた。親猫はそれから生まれたての子猫を引き寄せ、その身体中を舐め回し、近寄ってきたもう一匹をも抱え寄せた。

「このできごと」は当時の私の受容力を遙かに越えていたためか、「事実」だけが鮮やかに記憶され自分がどのような感情を抱いたのかについての記憶がない。ただ、翌日はウキウキと「ミーが赤ちゃんを産んだよ」とふれ回ったことを覚えている。

キと「ミーが赤ちゃんを産んだよ」とふれ回つたことを覚えている

人間が生まれる場に遭遇したのは、それから二〇年も後だった。その時、心の片隅で哺乳動物の産まれ方の共通点を密かに再確認している、そんな自分のタフさに内心驚いた。

△産に立ち会うこと△

私たちは、現在の暮らしの中で生きもののリアルな生や死の過程にどれ程でくわすことができるだろう。産の体験者たちでさえ、初めての妊娠や出産の前に自分の身に起こる諸事について知る機会をどれ程持つことができただろうか。

戦後の日本社会では、人間が「生まれる」という営みは次々と病院の中に取りこまれ、医学的管理下に置かれるようになつた。その結果、産は日常生活から隔離され、産のありようを伝えていく文化的基盤は断ち切られてきた。また「病人的地位」を与えられた産む女性たちは、安全性と引き換えに、産に対する主体性を放棄させられてきた。

こうした現象に対するある種のオールターナティブとして、七〇年代後半から、「ラマーズ法出産」に代表される、夫立ち会いの出産が巷間にもてはやされた。日本に伝えられたラマーズ法は仏人ラマーズ医師が考案した出産に対する考え方・方法、すなわち、
1)産の前こそその正しく知識と経験を知ること

(2) 産の経過に合わせた呼吸方法を習得し活用すること

(3) 分娩準備訓練を指導し、分娩時に立ち会い介添をする人（モントリース）をおくことであり、これらにアメリカ文化の影響が加味され「(3)=夫」という形となつて輸入された。夫だけでなくわが子にもきょうだいが生まれ来る場を共有させようとする夫婦も現れた。

立ち会いという新しい産の方針に対し、「病院の分娩室は狭く立ち会いができる構造になつていない、衛生面での問題や心配がある、いきなり出産に立ち会わされた夫が気分を悪くしたり倒れたりして医療者に余計な負担をかける」、また「そもそも男や子どもが産に立ち会うなんてとんでもない」という感情論など、様々な反論も現れた。反論はわずか四〇年程の歴史しか持たない病院出産を「是」とする立場から、あるいは病院出産しか知らないが故に発せられているものがめだつ。

しかし、ラマーズ法に代表される産の変化や問い合わせの動きは、女性たちに産む主体としての自覚を促し、産を共有する身近な他者を出現させた。また「生まれること」を日常生活に引き寄せ、この営みを語り継ぐ働きをした。

興味深いことに、実際に男性や子どもと共に産の場を共有してみると、私には、男性以上に子どもたちのほうが、産を見つめることに対してタフであるように思えてならない（もちろん事前事後に大人からの配慮がなされるに越したことはないが）。子どもたちは、私がそうであったように、事実をひたすら直視する。その時おそらく、生命の営みの厳然たる事実を見つめることを通して、理屈を越えた貴い何かを肌で知るに違いない。

次世代へ

生や死が暮らしの中から切り離される過程で、私たちは「生まれること・生きること」と「死すること」に対する意味や価値を問う機会をも喪失してきたのではないだろうか。

「産」という営みを共有すること、それは極限を乗り越える赤裸々な他者と付き合うことであり、またその他者に寄り添うおのれ自身とも付き合うことを意味する。こうした体験を語り継ぐことは、次の世代に誕生や死といった多様な生の側面を思索する機縁をつくるだろう。そして、こうしたことなどを共有し語り継ぐ人が増えていくとき、私たちの日常は、もう少し温もりやいたわりが行き交う空間になるような気がしてならない。